

よしもとばなな「キッチン」が大島弓子作品から受け継いだもの
——「バナナブレッドのプディング」と「夢のキッチン」——

原 亜由美

はじめに

よしもとばなな（一九六四年―、二〇〇二年に「吉本ばなな」から改名）の文壇デビュー作「キッチン」（初出『海燕』六巻一一号、一九八七・一一）は、最後の肉親であった祖母を亡くして精神的に疲労した桜井みかげが、一つ年下の青年・田辺雄一とその母（実は性転換をした父）・えり子と擬似家族になることで生きる力を取り戻す過程を描く物語である。続編の「満月——キッチン2」（初出『海燕』七巻二号、一九八八・二）では、そこから半年後の秋、えり子を喪つて天涯孤独になり、自暴自棄になった雄一が今度はみかげに救われるまでが描かれる。

稿者は修士論文において、「キッチン」が大島弓子の漫画作品「七月七日に」（初出『別冊少女コミック』一九七六・七）の「引き写し」「剽窃」である、という批判^①を出発点として、実際に二作品の比較を行った。その結果、元男性の母親という登場人物の造型は確かに「七月七日に」から「キッチン」へ継承されているものの、「引き写し」

や「剽窃」と言うには当たらない、という結論に至った^②。一方で、その調査を進めるうち、同じ大島の作品「バナナブレッドのプディング」（『月刊セブンティーン』一九七七・一一―七八・三）が、構造面において「キッチン」に影響を与えているのではないかと考えるに至った。

ばななは大島に宛てたメッセージの中で、次のように述べている。

大島作品を水のように飲み、空気のように呼吸して育ってしまつた人造人間のようなものだと自分を感じています。十歳くらいからずっと、常に最新作を追っていました。

うすい性描写、バイセクシユアル志向、自然との調和、淡いが真実をついた人間関係。「中略」とにかくひきつけられました。「バナナブレッドのプディング」は高校生のとき全文を丸暗記し、苦しい時期だったので、いつも持って歩いていました^③。

「キッチン」は、発表当時、感覚や文体の「新しさ」が話題となり、

多くの論評が提出された。しかし、これが少女漫画に由来することに注目した論者は少数派であり、具体的な漫画作品を挙げて論じたものは極めて少ない。一九八〇年代後半から九〇年代初めにかけて「春樹現象」に続く「ばなな現象」を起こした初期作品の研究において、大島弓子との関連はさらなる調査の必要があると考え、本稿では先に挙げた「バナナブレッドのプディング」が「キッチン」の成立に関わった可能性について検討する。なお、「キッチン」と「満月——キッチン2」は一連の作品として扱い、それぞれ単独に言及する際は便宜的に前編「キッチン」、後編「満月——キッチン2」と表記する。

一、「キッチン」と「バナナブレッドのプディング」

(一)「バナナブレッドのプディング」について

大島弓子（一九四七—）は一九六八年、短大在学中にデビューした漫画家。「ポーの一族」（『別冊少女コミック』一九七二—七六）の萩尾望都（一九四九—）、「風と木の詩」（『週刊少女コミック』一九七六—八四）の竹宮恵子（一九五〇—）らと並び、少女漫画というジャンルを確立した「花の二四年組」（昭和二四年前後生まれの優れた少女漫画家たちをさす）の一員と称される。

「バナナブレッドのプディング」の初出は『月刊セブンティーン』一九七七年十一月号—七八年三月号、全五回の連載。各回の副題は「Part1 インスタントコーヒーになる前（十一月号）」「Part2 ライナスの毛布（十二月号）」「Part3 ドッペルゲンガー?」（一月号）」「Part4

人生にスロービデオがきいたなら（二月号）」「Part5 お酒の力をかりて：（三月号）」。初刊は『バナナブレッドのプディング』（集英社、一九七八・七）。岡崎京子⁽⁴⁾、よしながふみ⁽⁵⁾、尾崎衣良⁽⁶⁾ほか多数の漫画家の発言、エッセイや作品中で取り上げられる、大島弓子の代表作の一つである。詳しいあらすじは以下の通り。

三浦衣良⁽⁷⁾は人と少し違った思考回路を持っている。両親は彼女を持って余し、姉の沙良⁽⁸⁾だけが唯一の理解者だった。しかし沙良が結婚して家を出ることになり、それを機に自分の精神鑑定をしようと両親が言っているのを聞き、衣良は不安にさいなまれる。

沙良の結婚式の前日、転入先の高校でも衣良は「明日は血液がフリーズドライ化するほどこわい日」といった発言をして教師に不審がられるが、そこがかつての幼なじみだった御茶屋⁽⁹⁾さえ子と再会する。衣良の話（高校生になった今も草を編んでリボンをかけて遊ぶこと、昔聞いた「夜更かしすると、『男でも女でもない美しい人喰い鬼』に食べられてしまう」という話が怖くて繰り返し夢に見てしまい、夜中のトイレは姉に付き添ってもらっていること）を聞き、彼女の精神的な幼さに驚いたさえ子は、恋人ができれば問題は解決するだろうから、いい人を紹介すると言う。しかし、衣良の理想の男性像は「世間以後ろめたさを感じている男色家」という奇妙なものだった。

サッカー部のマネージャーであるさえ子は衣良の恋人候補として部員を当たってみる中で、自分の片思いの相手・奥上⁽¹⁰⁾大地が男色家（しかし世間以後ろめたさは感じていない）だと知りショックを受ける。そこに部のコーチであるさえ子の兄・峠⁽¹¹⁾が現れ、衣良は彼がさえ子の

紹介する男性だと勘違いする。何も知らない遊び人の大学生・峠はさっそく放課後に衣良と会う約束を取り付ける。

放課後、二人は「石蹴り」で対決することになる。衣良のほうは真剣で、「私が勝ったら結婚してください」と峠に言い、冗談と思った峠はそれを了承する。結果は衣良が勝ち、「明日、結婚のため御茶屋家に行く」という言葉に峠は「積極的な子だ」と喜ぶ。

翌日、沙良は結婚式を挙げ、衣良も峠と「結婚」するべく家を出る。衣良の両親、特に母親は困惑するが、さえ子の説得により、しばらく衣良を御茶屋家に預けることにする。一方、峠はさえ子の置き手紙によつて真相を知り大慌てするが、結局は衣良と形だけの式を挙げる(連載第一回「インスタントコーヒーになる前」)。

衣良が「あなた(峠)の恋人もここに呼んで」と言い出したため、さえ子が奥上大地に芝居を頼んで連れてくる。衣良は「私はあなたたちが安心して付き合えるようになるためのカーテンになる」「二人が勇気を出し、世間に関係を隠す必要がなくなった時に出て行く」と言い、それを聞いた峠は「うまくいけば早く解放されるかもしれない」と安堵する。

その夜、衣良は子供の頃から見ている「男でも女でもない美しい人喰い鬼」の夢を見る。しかしその日の夢では、途中で峠が現れ衣良を助けてくれた。

翌朝、さえ子と峠は傷だらけの奥上に会う。奥上は、昨日の芝居の一部を本来の恋人に目撃されてしまったために浮気を疑われ、一晩中暴行を受けたと言い、峠の相手役を降りる。

よしもとばなな「キッチン」が大島弓子作品から受け継いだもの

その日の午後、衣良の前で「世間に後ろめたさを感じなくてもいいようになるためのレッスン」の芝居をすることになっていた峠は、大学の友人に代役を頼む。「レッスン」は失敗するが、嬉しそうな様子の衣良を見て、峠は「彼女こそ俺を必要としていたのだ」と気づく。そして精神的に不安定な衣良のために、しばらくは彼女の「ライナスの毛布」でいよう、と思いなおす。他方、放課後に奥上の下宿を見舞ったさえ子は、奥上が寝言で峠を呼びながら泣くを見て、改めて自分が失恋したことを知る(第二回「ライナスの毛布」)。

衣良は峠との距離を縮めていくが、峠を「神様のようだと思わないように」自らを戒める。かつてそう思っていた沙良が、自分の側を離れていったからだだった。

奥上は峠に対して特別な感情を抱くようになり、寝不足のため部活中に倒れる。その日も眠れないでいたところに、峠が訪ねてきて消灯を言い渡す。奥上は喜ぶが、それをまたも恋人に知られる。翌日、さえ子と峠が部屋の様子を見に行くと、学校を欠席した奥上がまた傷だらけになっていた。「元はといえば俺が芝居を頼んだからだ、俺がお前の恋人に事情を話す」と峠は言い、そこで件の恋人は峠も良く知っている哲学科の大学教授・新潟健一だということが明らかになる。

峠とさえ子のあとをつけて来ていた衣良は、舞台裏の事情を知ったことで「わたしはどうして御茶屋家にいるの」とひどく混乱し、支離滅裂な行動をとるようになる。「沙良が新婚旅行から帰ってきているはず」と自宅に戻ってみるが姉はまだ旅行中で、両親が「なんであの子(衣良)は沙良のようにちゃんと育ってくれなかったのかしら」と

話しているのを聞く。自分の居場所がどこにもなくなったと感じる衣良は、「沙良の赤ちゃんに生まれ変わりたい」と涙を流す。

その晩、芝居の件を弁解するため教授の家に向かった峠は、途中で自分そっくりの男に出会う。捕まえて見るとそれはさえ子だった。昨夜、奥上の部屋に行ったのは実は峠に変装したさえ子で、彼女もまた兄のふりをして教授の家へ行こうとしていたのだった。しかし、そこには先回りした衣良がいた。衣良も誤解を解きに来たのだったが、教授は峠への復讐として、衣良に「峠とは別れ、自分と同居するのはどうか」と提案していた。衣良は迷わず従い、峠は戸惑う。(第三回「ドッペルゲンガー?」)。

教授は、かつて自分がカウンセリングした精神病の「哲学専攻の学生」を例に持ち出して衣良の両親を説き伏せ、精神の治療を目的に自分との同居を承諾させる。

衣良は教授とその家政婦との三人生活を始める。しかし、理想通りの「世間以後ろめたさを感じている男色家」と生活しているはずが、どうしても峠のことを考えてしまう。ずっと憧れていたバナナブレッドのプディングを作るものの、教授たちと一緒に食べてみると「かさぶたの味」「枯葉の味」としか感じられなかった。散歩に出た衣良は他の女性と話している峠を見かけ、「ああどうしよう」「こわれそう」「たすけて」と、今まで感じたことのない感情に混乱し、その場を逃げ出す。そしてまた人喰い鬼の夢を見るようになり、とうとう鬼に食べられてしまう。

さえ子に「サッカー部の試合の応援に来て」と誘われても、衣良は

峠が憎く思えて仕方がなくなり、同時にそんな自分が不可解でならない。その末に「夢で鬼に食べられて自分も鬼になったのだ」と思い込む。衣良は顔を覆うような髪型に変え、かつては嫌悪していた化粧で鬼を装うようになる(第四回「人生にスロービデオがきいたなら」)。

久々に会った奥上に別れを告げられ、激怒した教授は奥上を打ち据える。その様子を見て落ち込んださえ子は、かつて新潟教授に人生を救われたという「哲学専攻の学生」に呼び止められ、成り行きでこれまでのことを相談する。学生の「男色家を愛して兄の扮装までしたのは、君がもともと兄を愛していたからだ」という結論にさえ子は驚かされるが、「兄と距離を置いたほうがいい」というアドバイスに従い、海外留学を決意する。

夜、家でヤケ酒を飲んでいた教授は、部屋に入ってきた衣良を奥上で見間違え、首を絞めようとする。抵抗した衣良は手元の果物ナイフで教授を刺す。実際は軽傷だったが、泥酔して眠り込んだ教授を見た衣良は殺人を犯したと思い込み、起きてきた家政婦の悲鳴を聞いて逃げ出し、自殺しようとする。家政婦から連絡を受けた両親に追いかけられつつ、衣良は御茶屋家に着く。中に入ると、留守と思った家には峠がいた。暴れる衣良を止めようとして峠は顔に傷を負い、それを見て衣良は気を失う。

衣良が目覚めると、峠は沸かしたミルクを差し出してくれた。衣良は自分が鬼になって峠を殺すことを恐れ、精神病院に入ると言い張るが、峠は「これからさえ子が留学するから一緒に食卓を囲んでほしい」と衣良を引き止め、「きみが大好きだ」と告げる。衣良は驚き、ミル

クを受け取ると峠の元に戻ることを決める。

その頃、沙良は不思議な夢を見る。まだ生まれてもない彼女の赤ちゃんが「生まれるのが怖い、一人ぼっちは嫌だ」と言う夢だった。沙良は「まあ生まれてきてごらんなさい。最高に素晴らしいことが待っているから」と答える。「『最高の素晴らしさ』ってなんなのだろう。わたし自身もまだお目にはかかっていないのに」と、沙良は両親に手紙を書いた（第五回「お酒の力をかりて…」）。

(2) 類似点の指摘

まず、語句レベルの類似として、「ライナスの毛布」がある。前編「キッチン」冒頭で、みかげは祖母の死後、田辺家に居候するまでの間は台所に布団を敷き、「ライナスのように毛布にくるまって」眠っていたと語る。

どこにいてもなんだか寝苦しいので、部屋からどんどん楽なほうへと流れていったら、冷蔵庫のわきがいちばんよく眠れることに、ある夜明け気づいた。「中略」ライナスのように毛布にくるまって眠る。冷蔵庫のぶーんという音が、私を孤独な思考から守った。

自室よりも台所のほうが安らかに眠れるというこのエピソードは、「私がこの世でいちばん好きな場所は台所」という書き出しの一文を裏付ける。と同時に、みかげが無機質な機械音に癒しを見出すほどの深い孤独を抱えていることを読者に印象づける。その後、初めて田辺家の

ソファで眠る場面では、

私は毛布にくるまって、今夜も台所のそばで眠ることがおかしくて笑った。しかし、孤独ではなかった。「中略」同じ屋根の下には人がいて、静かで……ベストだった。ここは、ベストだ。

と、同じように「毛布にくるまって」眠るが、「孤独」ではなくなったことが明示されている。「ライナスの毛布」は「Security blanket（安心毛布、お守り毛布）」とも呼ばれ、一般には手にしていれば安心を得られるもの、心の拠り所という意味で用いられる^①。台所で眠っていた頃のみかげは安心を求めて「ライナスのように」毛布にくるまったが、田辺家のソファという、自ずから安心を見出せる居場所を得てからは、その必要はなくなったことが読み取れる。

「バナナブレッドのプディング」連載二回目のサブタイトルは「ライナスの毛布」である。この中で峠は、衣良が精神的に自立できずに彼女を保護しよう、「彼女の『ライナスの毛布』」になろう、と決意する。そのおかげで、衣良は孤独感から解放され、それまで繰り返していた人喰い鬼の夢を見ずに眠れるようになる。

以上のように、いずれの作品においても、主題の大きな部分を占める「孤独」から主人公を守るものとして「ライナスの毛布」が登場する。ばなながこの語を意図的に用いたのかどうかまでは断言できないが、「高校生のとき全文を丸暗記」するほど「バナナブレッドのプディング」を読み、持ち歩いてきたというのだから、影響を受けている可

能性は大いに考えられる。

もう少し大きく、作品全体に関わる類似点としては、次の二点が指摘できる。

一、主人公が孤独を感じて精神的に不安定になり、他者の力を借りて立ち直る過程が二度繰り返される構成、その手段として途中で血縁によらない擬似家族を形作ること。前編「キッチン」では祖母を喪ったみかげが田辺家によって、後編「満月——キッチン2」ではえり子を喪った雄一がみかげによって救われ、自立するまでが描かれる。「バナナブレッドのプディング」では、沙良が嫁いでしまい、不安定になった衣良が一度は御茶屋家に救われるものの、芝居の舞台裏を知って再び孤独になり、新潟家への居候を経て、最終的に峠と結ばれることで精神的な安定を得る。

二、不安定になった登場人物が、与えられた飲食物をきっかけに立ち直る。「キッチン」で、えり子を喪って自暴自棄になった雄一を現実に引き止めるきっかけになったのは、みかげが遠路はるばるタクシーに乗って届けたカツ丼だった。「バナナブレッドのプディング」では、教授を殺したと思い込んで夜道を逃げ、自殺しようとする衣良を落ち着かせたのは峠が差し出した温かいミルクだった。いずれも、信頼を置く人物が差し出す飲食物がきっかけで、放浪を思いとどまる。これらの点を理解しやすくするため、両作の展開を並べて図式化したのが図1である。このように整理すると、特に(A)、(B)と番号を付した冒頭と結末の類似が明らかであろう。

二、疑似家族と「夢のキッチン」

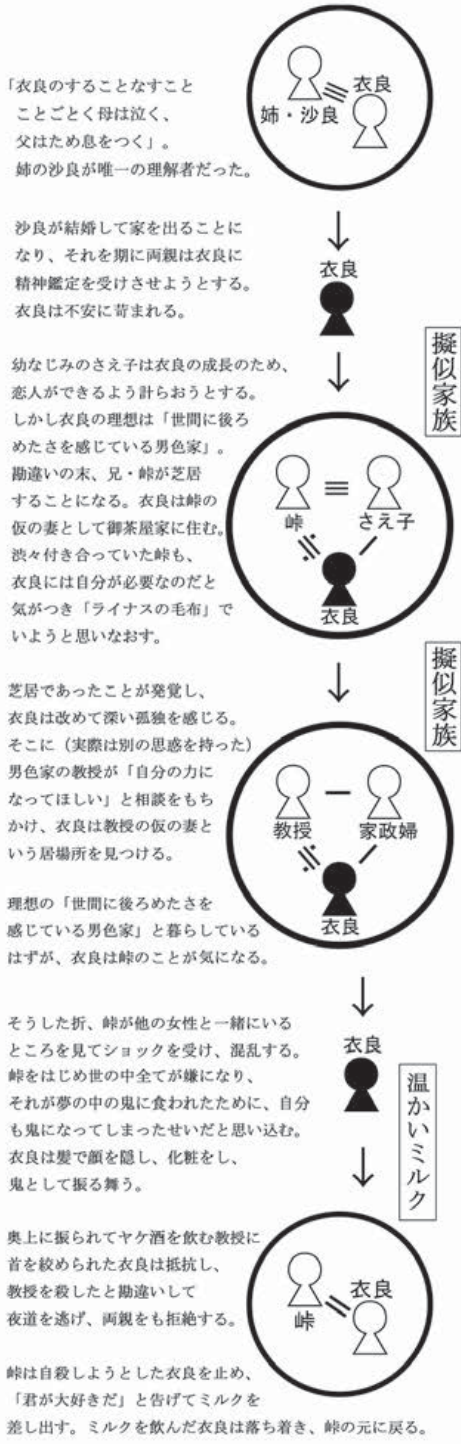
(1) 大島作品における「疑似家族」

「キッチン」と「バナナブレッドのプディング」両作において重要な要素となるのが、主人公に立ち直るきっかけを与える「疑似家族」である。

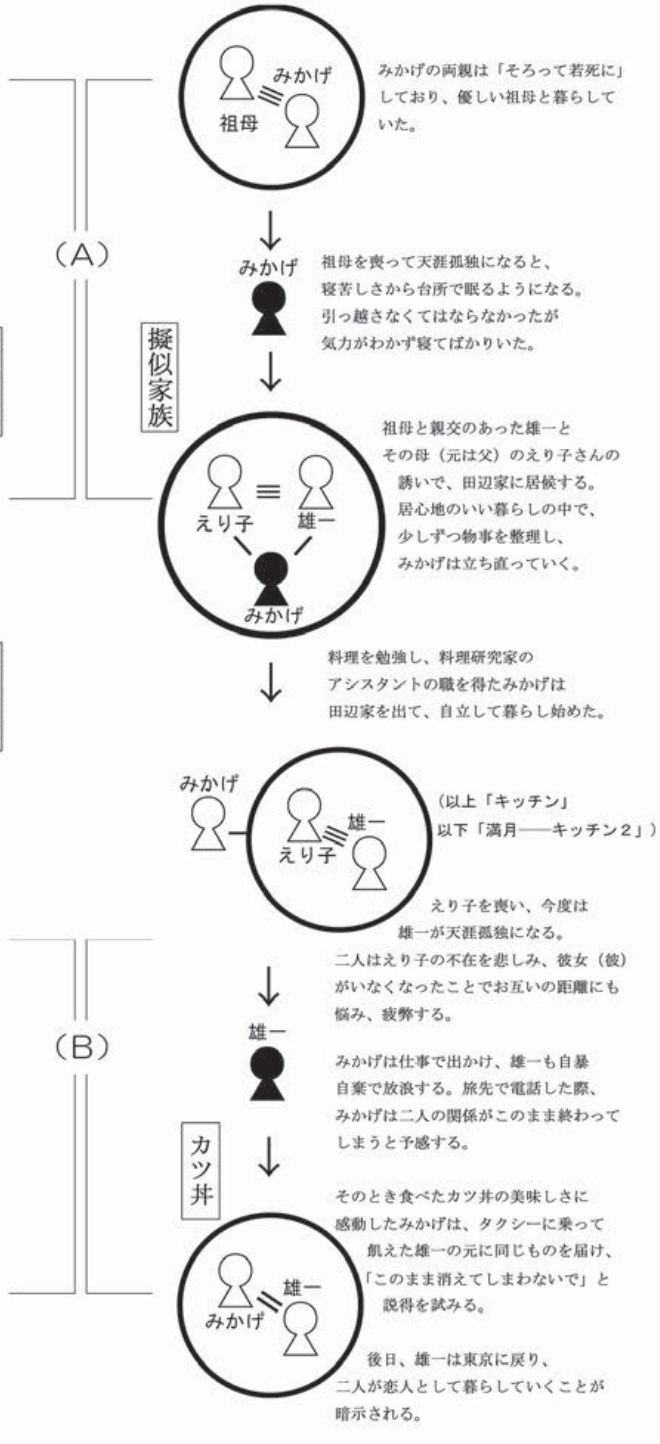
「キッチン」では、天涯孤独となったみかげが、元父親の母親・えり子とその息子・雄一が住む田辺家に居候することになる。「バナナブレッドのプディング」では、姉の沙良と離れ孤独にさいなまれる衣良が、峠・さえ子兄妹の御茶屋家に峠と「結婚」する形で加わる。こうして生まれる疑似家族は、本来の家族が癒し得ない主人公達の傷を癒す働きをしている。

大島は、しばしば作品の中で血縁によらない「疑似家族」を描いている。「鳥のように」(『別冊少女コミック』一九七二・五)では、高校の数学教師とその息子二人の父子家庭に主人公の少女が家事をしに行き、母親代わりになる。「なずなよなずな」(『週刊少女コミック』一三号—一八号、一九七四・三—四)や「ヨハネが好き」(『別冊少女コミック』一九七六・一)の中でも、主人公の少女が、親代わりに弟妹を育てている男子学生を手伝い、母親の役割を果たす。「いちご物語」(『週刊少女コミック』九号—三三号、一九七五・二—八)では、日本を捨てた父親とともに北欧のラップランドに住んでいた少女・いちごが、父の死を機に日本にやってきて、縁もゆかりもない日本人一家の一員として暮らす。

「バナナブレッドのプディング」



「キッチン」「満月—キッチン2」



※円は家族（必ずしも血縁によらない）を表し、「-」は信頼関係を表す。特に血縁によるつながりは「≡」、恋愛によるものは「=」（擬似恋愛関係は「≡」と表す）。孤独で精神的に不安定になっている人物は黒で表す。

図 1

「七月七日に」(『別冊少女コミック』一九七六・七)は、両親を亡くした主人公を、女装した青年が母親のふりをして育てる話である。「綿の国星」(『Tata』一九七八・五―八七・三)では、自分はやがて人間になると夢見ている捨て猫が拾われ、温かい家族と暮らすうち、猫は一生猫のままであることを知って成長する。「夢虫・未草」(『デュオ』一九八三・七)では、主人公の父親が、家庭のある女性と不倫し、戸惑う主人公と母親の元にその愛人がやってきて、二つの家族が一緒に暮らすことを提案する。「ダイエット」(『ASUKA』一九八九・一)は両親から愛情を受けられずに育ち、寂しさから過食・拒食に走る主人公を、その友人の高校生カップルが「自分たちの子」として精神面を育て直そうとする姿を描く。

機能としては、「鳥のように」、「なずなよなずな」、「ヨハネが好き」、「いちご物語」、「綿の国星」における擬似家族は物語が展開する場として、「夢虫・未草」、「ダイエット」においては、擬似家族が物語を収束させるための小道具として用いられている。「バナナブレッドのプディング」、「キッチン」に登場する擬似家族は、前者と同様の役割を担っているといえる。

では、「擬似家族」とは一体何なのか。なぜ擬似家族の中で、主人公達は孤独を癒されるのであろうか。

(2) 居場所としての擬似家族

漫画研究家の藤本由香里は、少女漫画のテーマは一貫して「私の居場所はどこにあるの?」という問いである、と述べる。これといって

取り柄のない少女が、憧れの男の子に「そんな君が好き」と認められて居場所を得る、というストーリー、古典的な少女マンガのイメージはその典型であり、様々なバリエーションはあれど、「少女漫画」に属する作品は何らかの形で、主人公の少女たちが「居場所」を獲得する過程を描いているのだと言う。

少女の「居場所探し」の旅はそのまま「あり得べき理想の家族の回復」への旅に他ならない。「中略」少女マンガでは、そこに何の血縁関係もなくとも、それがどんなに変形の家族形態であっても、心地よい「居場所」さえあれば、それが「家族」なのである⁽⁸⁾。

ここで述べられる「家族」はまさに衣良が心の平安を見出し、みかげが再生する場となる擬似家族である。

衣良は理解者であった姉が結婚したために、精神的な意味合いで家族を失ったと言える。一方、みかげは祖母を亡くして孤児となり、物理的に家族を失っている。そうした事情で孤独を抱えるようになった主人公たちに新たな「居場所」を与えるべく、擬似家族が登場する。

ところで、藤本が言う「少女の居場所探しの旅」とは、本来は存在しないものを見出すための道程である。「居場所」は主観によって作り出されるもの、自分がそう感じた場所が居場所になるという性質のものであり、幻想の産物と言ってもよいからだ。

米沢嘉博は『戦後少女マンガ史』の中で、「バナナブレッドのプディング」の衣良を脅かす夢の人喰い鬼(図2)は、「少女の夢を壊そうとする日常」に潜む「現実の重みであり肉体を持つ自分」を象徴すると説明し、「ライナスの毛布をはなせない少女」は、日常と夢の狭間

で苦しみつつも、日常を夢の延長として生きようとするのだ、と述べる⁽⁹⁾。

御茶屋家と新潟家という、特殊な事情のもと成立した三人家族（前者の場合、さえ子の機転と峠の協力、そして二人の多大な善意があった）でできた芝居であり、後者は、峠に対する教授の嫉妬心と復讐心が動機となっている）は、衣良の幻想を現実に実体化させるために作り出されたものである。いずれも結局は崩壊するが、衣良は一時的にはあれ、そこで「世間に後ろめたさを感じている男色家」を助ける妻としてのポジションにつき、安寧を得る。

「バナナブレッドのプディング」に登場する擬似家族は、本来は幻想でしかない「少女のための居場所」を現実の中に作り出す場だとと言える⁽¹⁰⁾。



図2 『バナナブレッドのプディング』より
(©大島弓子 ©集英社)

よしもとばなな「キッチン」が大島弓子作品から受け継いだもの

「キッチン」においても同様に、不安定な状態に陥っていたみかげのりハビリ施設となったのは、えり子・雄一と作る擬似家族である。孤独になり、育った家も出ることになったみかげが居候する田辺家には、みかげのお気に入りとなる台所があり、「同じ屋根の下には人がいて、静かで」、「ベスト」な寝床を提供してくれる。「安心して利用してちょうだい」と言うえり子、「あせるな」と声をかけてくれる雄一の親子がいるその家は、非現実的なほどに理想の「居場所」である。

前編「キッチン」の末尾でみかげが語る、「私の生きるすべての場所」持つであろう「夢のキッチン」とは、(まさに「夢の」という形容詞がついている通り)この「居場所」をさしていると考えられる。現に、続く「満月——キッチン2」では、みかげは田辺家とのつながりを保ちつつ、「料理の先生のアシスタント」という居場所を得て、充実した日々を送っている。人は社会のどこかに属している、という意識から居場所を見つけるが、台所が「この世でいちばん好き」なみかげにとっては、それが「夢のキッチン」ということになるのだろう。

むすび

ばななはエッセイやインタビューの中で、大島以外にも多数の漫画家の作品に触れて育ってきたことを語っている⁽¹¹⁾。少女漫画のテーマや素材は、同時代の少女小説⁽¹²⁾と共通するものもあり、「擬似家族」というモチーフを扱った作品もまた数多く存在する⁽¹³⁾。

こうした事情から、「キッチン」の源泉を大島作品(前稿で扱った「七

月七日に」と「バナナブレッドのプディング」のみに求めることに無理があるかもしれないが、本稿では、ばななの愛読ぶりからして、大島からの影響が最も濃厚であろう、という立場から論じた。

この立場で考えると、「キッチン」は大島作品を小説の形に改めただけの作品か否か、という点について述べる必要が生じるが、本質的な部分においては、「キッチン」は「バナナブレッドのプディング」を完全に換骨脱胎した、とまでは言い難い。孤独になった主人公が、奇妙な擬似家族を形成することで現実に戻る力を取り戻す、という筋書きは、「バナナブレッドのプディング」をなぞつたに過ぎないと評されても仕方がないだろう。

しかし、少女漫画という（現在では映画やテレビドラマなど、より広いメディアの原作となる少女漫画作品もあるが、少なくとも七〇—八〇年代には）社会の一部の層向けのものであった作品の優れた部分を、より普遍的に、一般に受容されやすい形で文章化した、という点は、「キッチン」の確かな功績であると言いうことができよう¹⁴。

「大島作品を水のように飲み、空気のように呼吸して」育ったばななの、特に初期作品には、意識的にせよ無意識にせよ、人物、構成、描写の方法など多岐にわたり大島弓子の漫画の影響が見受けられるが、多くの場合それは断片的な情報であり、一部の大島弓子読者のみが知り、一般には知られていないものもある。よしもとばなな作品を正しく評価するためにも、大島作品をはじめとした漫画からの影響については、さらなる研究が必要であると考える。

注

- (1) 「両方お読みになっている方にはなんの説明もいらなと思います（中略）『キッチン』は大島弓子の作品のほとんど引き写しです」（石井朱美『キッチン』と『七月七日に』『苦読点 第三号』一九九九年・一二）。
- (2) 拙稿「吉本ばなな「キッチン」と大島弓子「七月七日に」——「えり子さん」と「母さま」——」（『歴史文化社会論講座紀要 第九号』、二〇一二年・一）。
- (3) よしもとばなな「私のたからもの」（大島弓子『大島弓子が選んだ大島弓子選集 第四巻』メディアファクトリー、二〇〇九年・二）。
- (4) 一九六三—。代表作は『pink』（マガジンハウス、一九八九・九）など。台詞・構図などに大島作品のパロディが多々見られる。
- (5) 一九七一—。代表作は『大奥』（白泉社、二〇〇五年—連載中）など。
- (6) 一九八〇—。代表作は『AMS:00君が好き。』（小学館、二〇〇五年・六）など。デビュー時（一九九七年）の筆名は「バナナブレッドのプディング」の主人公と同じ「三浦衣良」だったが、二〇〇二年「第五〇回小学館新人コミック大賞」の受賞以降、「尾崎衣良」名義で活動している。
- (7) ライナスは、チャールズ・モンロー・シュルツ（一九二二—二〇〇〇）『ピーナッツ』の登場人物。一九五〇年から二〇〇〇年までアメリカの新聞七紙に連載された、日本では特に「スヌーピー」で知られる漫画（スヌーピー公式サイト <http://www.snoopy.co.jp/>、二〇一二年・九参照）である。一九五二年にライナスが毛布を手に登場して以降、たびたび彼が毛布に固執する様子が描かれている（チャールズ・モンロー・シュルツ、谷川俊太郎訳『おはようライナス君』ツル・コミック社、一九七〇・三など）。
- (8) 藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？ 少女マンガが映す心のかたち』学陽書房、一九九八・三。

(9) 米沢嘉博『戦後少女マンガ史』ちくま文庫、二〇〇七・八。

(10) 先に挙げた、擬似家族を描いた大島作品群についても同様のことが言えるが、大島の作風の変化もあり、初期の作品「鳥のように」では、擬似家族の機能はそれほど意識されていない。

(11) 岩館真理子（一九五七―）。代表作は『うちのママが言うことには』全五巻、集英社、一九八八―一九九五など）ほか。詳細は前掲の拙稿を参照のこと。

(12) 代表的なレーベルは、集英社から一九七六年に創刊された「コバルト文庫」。主に十代の少女を対象とし、現在の「ライトノベル」の隆盛にもつながる流れを築いた。

(13) 少女漫画に見られる家族像については前掲（8）が詳しい。

(14) 漫画の内容を文章化するために必要な技術については、前掲の拙稿を参照。

付記

よしもとばなな作品からの引用は『キッチン』（福武書店、一九八八・二）に、大島弓子作品からの引用は『バナナブレッドのプディング』（集英社、一九七八・七）に拠った。□内は稿者による注記である。